

話 題

その 2

キエフ All-Union Conference 雑感

—— 中性子物理 ——

1974. 12. 6

井出野一実(原研)

1974年の11月にドイツのKiel大にいた友人がこのキエフ国際会議を紹介している記事を Atomnaya Energiya からコピーをとって送ってくれた。それから一週間とたたないうちにこのProceedingsを原研の核データ研究室でよむ機会を幸運にも得ることができた。しかし、おかげで、その中のひとつの論文のために眠られぬ一夜をすごすことになった。ドイツ人はこの論文の存在を手紙でしらせてくれたのである。

1973年5月末にソ連のキエフでひらかれた第2回目の中性子物理の国際会議は、このようにして1年半後に、突然、わたくしの身近かな存在となった。それも大量4分冊の中の10ページ余りによってである。

この会議については Sukhoruchkin が Atomnaya Energiya (1974年) でくわしく紹介しているので、その内容についてはそちらを参照されることをすすめる。(この紹介記事を書いている Sukhoruchkin はここ数年来の仕事上の同僚である。) この会議報告書がアップीलする対象者は、原子炉のための核データ収集者、核分裂に関する最新情報の仲介者、中性子共鳴の Superfine structure に関心をもつものなどなど、中性子物理に関係しているものすべて——以上がこの会議についてかけるわたくしの情報のすべてである。

それでは国際会議とは何か。個人的な体験もふくめて、これが後半の文章の主要な部分である。

海の向うで知らないうちに国際会議がひらかれる。そして1年以上もたったある日、突然、研究室の書棚に1000頁にもならんとするProceedingsがならぶ。これをみて途方にくれる。なんとなく気になるから、一応めくってみるが、やはり知らないことにして無視する。それでも一向に困ることにならない。これは長年の経験でしっている……。

たまたま会議に出た人は、つぶやくともなくつぶやく、“われらの報告は悪評じゃなかったよ。だから、好評だったにちがいない。”かくして、かれは論文リストに着実に一篇をくわえたのである。

以上のように国際会議にかかり合うチャンス(実質的にはProceedingsにかかり合うチャンス)が日常的になりつつあるとき、これらの大量の情報をどうするかということは個人のレベルで切実な問題である。ではどうするか。

わたしの見解では、情報というものは一方的に受けとるだけでは死んだも同然で、あたえること、

すなわち、参加することによって初めて運動の原動力になりえるものだ。これはある意味で評論家と実験者の違いみたいなものである。実験をしているものは、自然との対話（情報の交換）を通じて評論家よりもはるかに真理に到達するチャンスと可能性を多くもっている。また、自然を対象とする物理学といえども、その進歩は、ハイゼンベルクがいうように、まさに人間と人間の討論によって生れる。多分、国際会議とは、このことを機能的に理解したひとたちが、機能的に組織したものにちがいない。

このキエフ会議の前年（1972年）にブタペストで中性子会議がひらかれた。これらのふたつの会議の内容は一部重複しているものもあるし、前者の話題がひきつがれ、発展させられている部分も見受けられる。このことから、これらは独立したものとはいえない。このブタペストにはわたくし自身は休暇をとって個人で参加したが、そのとき、わたくしの演壇に通訳をつれて頭から湯気をたてながら真赤な顔をしてくっついてかかってきたロシヤ人がいた。実はこのときのかれの反論がそのまま翌年のこのキエフ会議の論文としてあらわれたのだった。このとき、握手をするなり、おまえの言うことを信じないと何人かに面と向かっていわれびっくりしたものだ（もちろん、かれもそのひとり）、もっとも圧倒されたのは、Coffee break のとき頃の中がぶーんとうなるほどのひとの声の反響である。これは日本の物理学会の休けい時間のときの騒がしさの100倍に相当する。これほどかれらの情報交換密度は高い。

情報を組み立てその流れを促進するのも人間であり、また、その流れを妨害したり、故意に利用しようとするのも人間である。この流れが国と国の関係におよんだとき、後者のタイプは、国際的に害があるという評価をうけることになる。要するに、かれには国際的感覚がないということである。逆に、真にinternationalな人間は、わたくしたちの身近かな関係においても、批判、反論、批判を自由に媒介する。しかし、このような人間が孤立して存在できるはずがないことも事実である。科学上の発見と業績が世界の科学界に影響をあたえることなく終った悲劇を歴史から取り出して、Kapitza* がその社会的基盤をくわしく解析している。かれによると、この悲劇はその当時の科学者がつぎのように振舞えなかったことが大きな原因である：“科学者の集団的な研究は、それが国内でおこなわれるものにしろ、国際的におこなわれるものにしろ、個人的な接触を通じてのみ可能である。自分の業績を世に認めさせるためには、科学者はそれを発表するだけではなく、さらに人びとにその正しさを納得させ、その意義を証明しなければならない。科学者がその実績によって集団の研究に影響を与えるためには、個人的な交際、活発な意見の交換、討論が必要であり、論文も手紙のやりとりも、それにとってかわることはできない…。どんな教科書も教師にとってかわることができない。” ここで教科書を部厚いProceedingsにおきかえれば、その

第2義的な意味がはっきりするとおもわれる。

国際会議やその報告書がほんとうに生かされるためには、その裏に科学者が自由に交流し合う国際的環境が保証されている必要がある。そして、わたくしたちの代わりに国際的な感覚をもったひとがひとりでも多くいることがのぞましい。わたくしの経験では、わたくしたちを取りすくかなりの部分がまったく反対の精神で運営されているようにみえてならない。

この文のはじめにふれたドイツの友人が送ってくれたコピーには、かれが読んだとき自分用にひいたアンダーラインがそのままうつっていた。このアンダーラインは中性子物理のあれこれではなく、それらの仕事をした人の名前の下にすべてひかれていた。かれは正しくも情報をになり人間の流れに着目していたのである。人間が最大の情報源である。これはあなた自身かも知れない。

あとがき

資料リストの後につけたキエフ・コンファレンスの論文リストは150を越える多数の論文表題と著者名について、井出野氏がロシア語から英語への翻訳を口述し、石原さんが筆記し整理したものである。原本は4分冊になっており、殆んどの論文はロシア語であるが、いずれにも多くは極く短い英文アブストラクトがついている。それにもかかわらず、表題と著者名のロシア文字ロシア語の英訳がついていないところが何となくソ連らしい。その程度のロシア語は読めるべきだということかもしれない。これだけ多数の論文が集っていると表題だけを通読しても多少コンファレンスの様子がうかがえるような気がする。

今回は手が廻らなかったが、次号以降は国際会議のリストを継続的に載せる予定である。

(更田記)

編集者 更田豊治郎
石原 待子

* Kapitza ; 「科学・人間・組織」みすず, 1974年。